

編集後記

新年第1号に早期胃癌の経過が主題としてとりあげられたことは、意義深いことと言えよう。

すなわち、この最も興味あり重要な、そして難しい問題が、すでにしっかりと多くの人々によりとりくまれており、本年はある意味における解明が期待されていることを示唆するとも考えられるからである。興味ある貴重な症例を提供して下さった方々、綜説を書いていただいた方々に衷心御礼を申し上げたい。そして多くの人々の協力により、この面での本年度の収穫が豊富になることを願ってやまない。

展望には仁井谷博士の癌化学療法、研究には高木博士らの十二指腸ファイバースコープの研究第3報をいただいた。技術解説には、信田博士の細胞標本の作り方、診断の手ほどきには内田、小俣、中島の諸博士の陥凹性早期胃癌鑑別診断の要点と、本号はまことに内容の優れた豊かな第1号になったことはよろこびにたえない。

本誌もすでに創刊以来5年目に入った。歳月の流れは早いものである。そしてこの4年間の、特に胃を中心とした診断面の進歩の大きかったことは、ふりかえって本誌をひもといてみると、今さらながら驚きにたえない。投稿の増加も大きく、投稿後1年もたたないと掲載されないという申訳ない事態に、すでに大分前から立ちいたっている。本年度はこの問題の解決をはりみながら、どのように発展してゆくであろうか。消化器病学全般に広がってゆこうという考えも、勿論すでに企てられつつある。

この面での読者諸兄姉の活潑な御意見をお願いしたい。

<崎田 隆夫>

<編集> 早期胃癌研究会